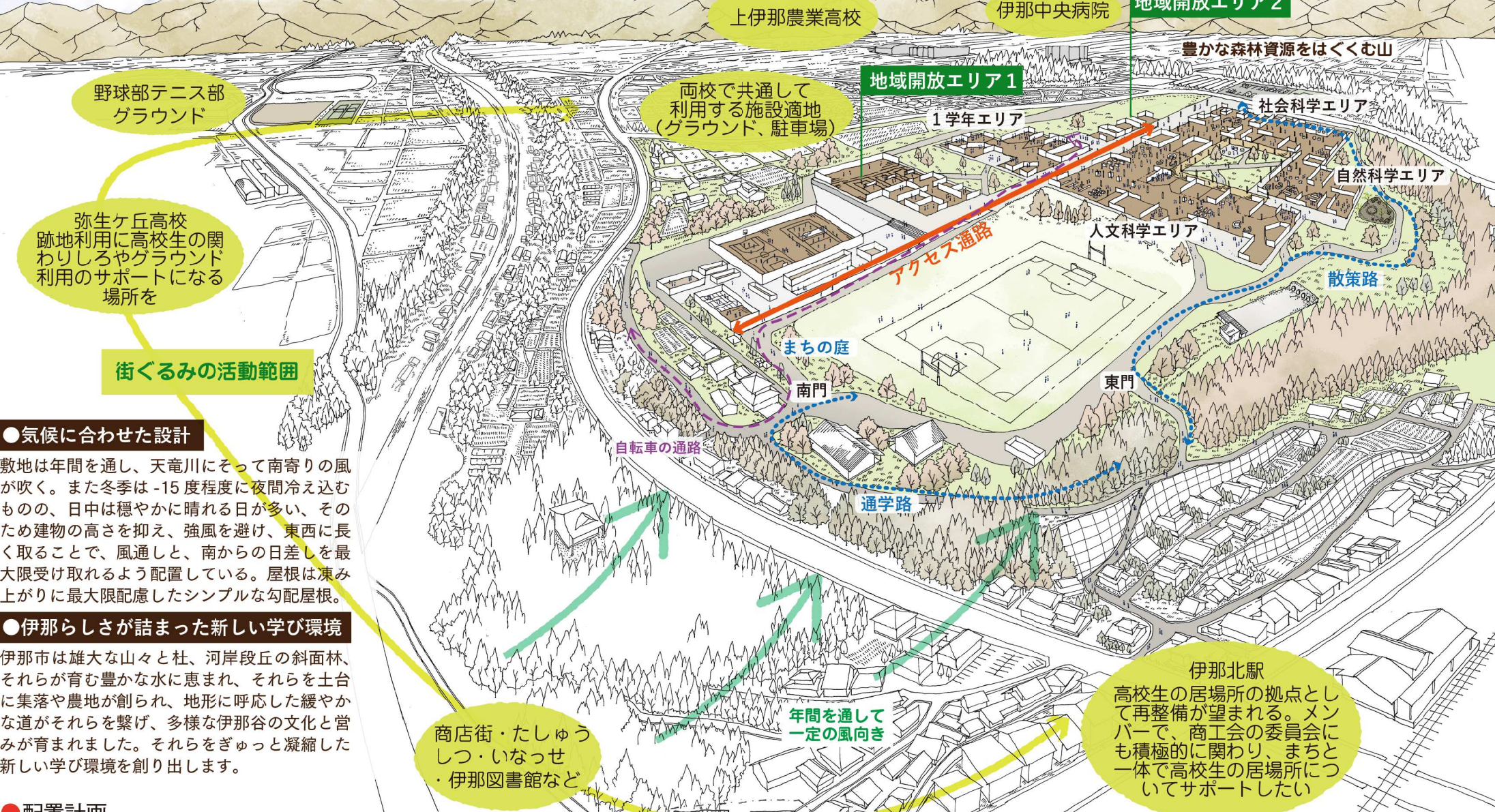


1.敷地条件等への建築的アプローチ

上伊那地域への深い理解「はじめにこどもありき」
— 真の上伊那共学共創コンソーシアムを目指して —



●気候に合わせた設計

敷地は年間を通し、天竜川にそって南寄りの風が吹く。また冬季は -15 度程度に夜間冷え込むものの、日中は穏やかに晴れる日が多い、そのため建物の高さを抑え、強風を避け、東西に長く取ることで、風通しと、南からの日差しを最大限受け取れるよう配置している。屋根は凍み上がりに最大限配慮したシンプルな勾配屋根。

●伊那らしさが詰まった新しい学び環境

伊那市は雄大な山々と杜、河岸段丘の斜面林、それらが育む豊かな水に恵まれ、それらを土台に集落や農地が創られ、地形に呼応した緩やかな道がそれらを繋ぎ、多様な伊那谷の文化と営みが育まれました。それらをぎゅっと凝縮した新しい学び環境を創り出します。

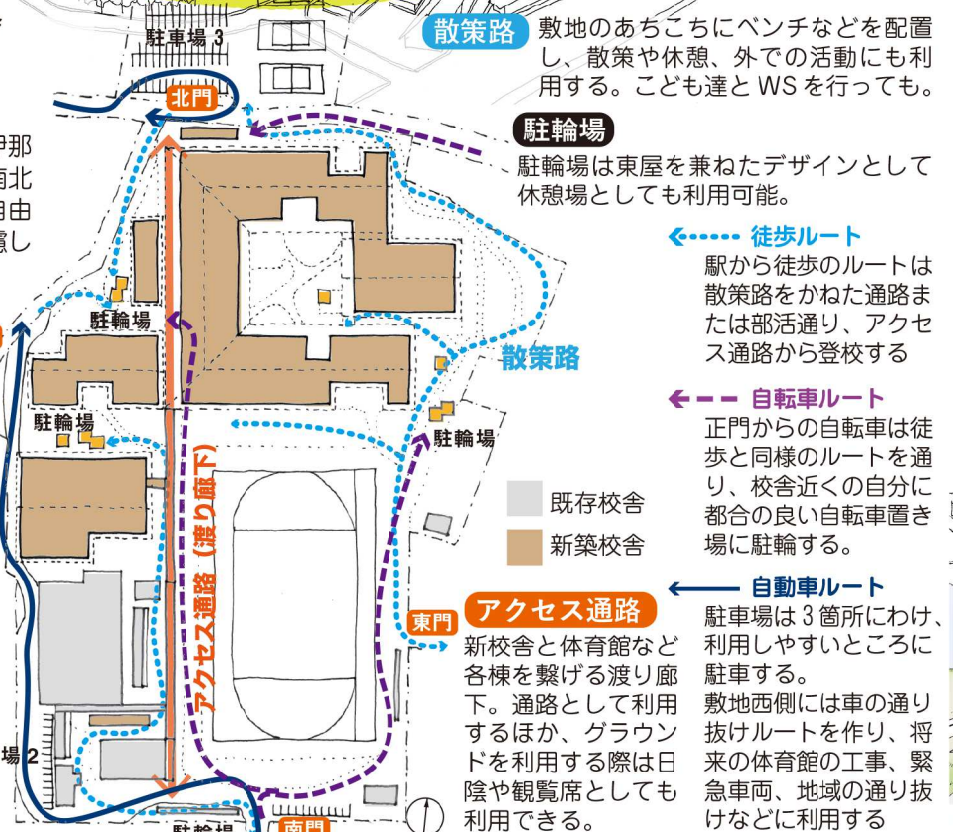
●配置計画

既存建物を併せ持つ敷地の北側グラウンド部分に平屋で新校舎を配置した。既存校舎の解体後にグラウンドを整備する。新校舎周辺には多様な通路や外部空間を整備し、外部や半外部の空間と室内を自由に利用できる。平屋の建物は将来の2次利用や増減築がしやすく、アメーバのように、これからの検討事項に柔軟に対応できる。また、平屋はエレベーターが不要なのでどんな人でも使いやすい。学校全体に面的に広がる平屋の計画はこども達が自ら居場所を見つけ出し、多様な活動と偶発的に出会うことを可能とする案がこれからの学びを創る計画にふさわしい。一方、校門から校舎までの距離が遠くなるが、南北に通路を直線で通し、自転車や徒歩でダイレクトにアクセスできるよう整備する他、主な駐車場を北側敷地に想定し、新校舎へのアクセスを結び直し、自主性を育む自由なアクセスとも矛盾しない。アクセス通路に面して、運動を中心とした「アクティブエリア」、避難所や地域利用もしやすい、「芸術と暮らしエリア」を配置している。建設後の野球部とテニス部は弥生ヶ丘グラウンドをソフトテニス部は敷地北側のテニスコートを利用する。

●アクセスと既存校舎

高校生の1日が自由に組み立てられるアクセス

正門を中心とした歴史ある伊那北高校の付まいから、東西南北に門を設け主体的な行動で自由に過ごせることに最大限配慮した自由なアクセスへ変更をしている。こども達の安全は地域で見守る文化の上伊那だからこそ取り入れられる提案。南門付近には地域の子ども連れながらも気軽に散歩に来られるようにまちの中に不足している小さなポケットパーク「まちの庭」を設け、学校を一周する散策路も。いろいろな世代の地域の人に関わることで、高校そのものをまちの一部として捉え直している。



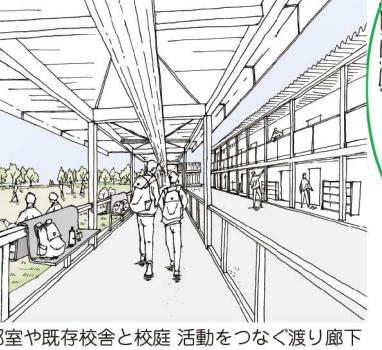
●敷地全体のゾーニング

地域開放エリア2

別棟でサポーター室学内スタートアップ地域共同研究室トイレを設け、校内に留まらない活動を支援できるエリアを設ける

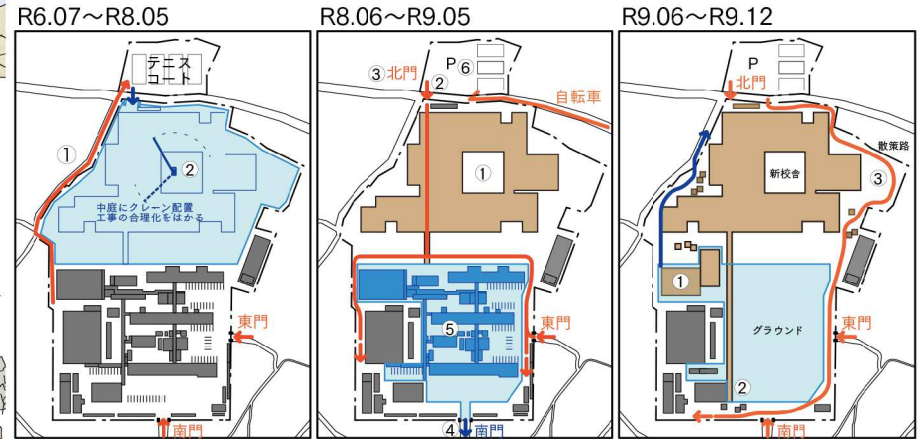
地域開放エリア1

避難所指定の小体育館に調理室などの機能を入れ実用的に配置。体育館の放課後利用、休日など部分開放が可能。

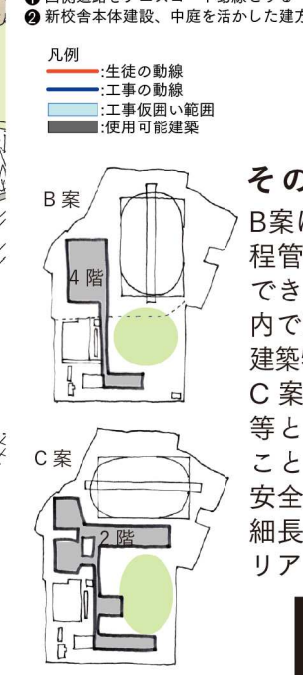


●建替計画

工事中の生徒の環境を考慮しプレファブを建てずに工事範囲が生活範囲と交差しないよう建替を計画する。木造平家建てのため工事騒音は最小限。



その他の配置案



●全体延床面積 12,825m²程度 ●木造平屋
●別棟扱いによるその他建築物(耐火性能)

